

『就実教育実践研究』第11巻 抜刷
就実教育実践研究センター 2018年3月31日 発行

学校と家庭間「行き来」の観点からみた
困難な家庭状況にある小学生の実態
— 学校・学級居場所化「きっかけ」把握のための
研究方法を中心にして —

**Actual Situations of Elementary School Students in Difficult Family Situations
from Viewpoint of Comings and Goings between School and Home: Focusing on
Research Method for Grasping “Trigger” to Make School or Class as Place to Stay**

笹倉 千佳弘 ・ 井上 寿美

学校と家庭間「行き来」の観点からみた 困難な家庭状況にある小学生の実態

— 学校・学級居場所化「きっかけ」把握のための 研究方法を中心に —

笹倉千佳弘 (幼児教育学科), 井上寿美 (大阪大谷大学)

Actual Situations of Elementary School Students in Difficult Family Situations from
Viewpoint of Comings and Goings between School and Home:
Focusing on Research Method for Grasping “Trigger” to Make School or Class as
Place to Stay

Chikahiro SASAKURA (Department of Preschool Education)
Hisami INOUE (Osaka - Ohtani University)

本研究の目的は、困難な家庭状況にある小学生が学校と家庭間を「行き来」するにあたり、彼女/彼らが学校や学級を居場所と認識するようになる「きっかけ」が、いかなる意味世界として経験されるのかを把握するために有効な研究方法を明らかにすることである。文献を検討した結果、「きっかけ」がいかなる意味世界として経験されるのかを把握するためには、エピソードを用いた研究が有効であることが明らかになった。また、子どもの意味世界をエピソードによって描き出すことの意味は、学校や学級を居場所として認識するようになった子どもに内在する「アクティヴな行動」や「現実に向かってはたらきかける行為のはたらきかけ」を描き出せることであると考察された。

エピソード, 意味世界, アクチュアリティ

I 目的

本研究の目的は、困難な家庭状況にある小学生が学校と家庭間を「行き来」するにあたり、彼女/彼らが学校や学級を居場所と認識するようになる「きっかけ」が、いかなる意味世界として経験されるのかを把握するために有効な研究方法を明らかにすることである。困難な家庭状況にある小学生が、学校と家庭間を行き来するためには、学校や学級を居場所と認識することが必要である。加えて、長期にわたり学校から離れていた子どもには、最初の一步となる「きっかけ」がなにかんづく重要である。したがって、彼女/彼らが学校や学級を居場所と認識するようになる「きっかけ」の意味世界を明らかにすることができれば、困難な家庭状況にあるがゆえに学校と家庭間を行き来できなくなっている子ども

もへの支援の一助となるに違いない。

笹倉（2017）によると、貧困や虐待、保護者の精神疾患等による困難な家庭状況下で学校に行っていない小学生をめぐる先行研究には、保坂（2010, 2014）、酒井・川畑（2011）、山田（2015）、新藤（2013）、山口（2013）、長尾（2008）があるが、いずれも、「問題としての不登校」という枠組みで論じられており「行き来」や「きっかけ」に注目しているものはない。

Ⅱ 背景

1 困難な家庭状況下で登校する小学生

小学校教員は、いかなる社会経済的要因が不登校を引き起こした、また、いかなる社会経済的要因が不登校を引き起こす可能性があるかと認識しているのかを明らかにするため、公立小学校教員4人に聞き取り調査を実施した。前者に関しては3事例が、後者に関しては9事例が得られた。それらを分析した結果、調査協力者は、ステップファミリー・母子家庭・実母による自己都合の優先・不安定な経済状況が、複合的に組み合わさったものが不登校を引き起こした社会経済的要因であると認識していた。また調査協力者は、母子家庭・実母による自己都合の優先・家族との関係不良・不安定な経済状況が、複合的に組み合わさったものが不登校を引き起こす可能性のある社会経済的要因であると認識していた。（笹倉・井上2017a）

上記から、困難な家庭状況下で生活していても登校する小学生、言い換えれば、不登校になっていない小学生の存在が確認できた。また調査協力者による認識では、不登校を引き起こした社会経済的要因と、不登校を引き起こす可能性のある社会経済的要因には大差がないことがわかった。

2 「登校/不登校」から「行き来」へ

困難な家庭状況下で生活していても、不登校になっていない理由は何であろうか。登校できる理由を「居場所」の観点からとらえた。なおここで言うところの居場所とは、「安全と安心が確保されている居心地のよい場所であり、同時に、他者からの承認のもとで自分らしさを発揮できる場所」のことである。加えて居場所は、実態的で固定的なものというよりも、むしろ子どもがそのようなものとして「認識する」ことが重要である。たとえば、コンビニエンスストアの駐車場が子どもの居場所になっていることを想起すれば理解できるであろう。

困難な家庭状況下で生活している彼女/彼らが登校できる理由は、次のとおりである。通常、子どもは、学校であれ家庭であれ、様々な活動をとおしてエネルギーを蓄えたり費やしたりしており、安全と安心が確保されているところでは蓄えられるエネルギーが費やされるエネルギーよりも多く、安全と安心が確保されていないところでは蓄えられるエネルギーが費やされるエネルギーよりも少ない。困難な家庭状況下で生活しているが登校し

ている彼女/彼らの場合、たとえば家庭生活では、貧困のためお金のことで両親の仲が悪い、いつ何時、暴力を振るわれるかわからないのでびくびくしている等、安全と安心が確保されておらず、家庭が居場所になっていない。しかし学校生活では、仲のよい友だちや教員がいて親の暴力から免れる、給食を食べることができる等、安全と安心が確保されており、学校が居場所となっている。

つまり、困難な家庭状況下で生活していても登校している彼女/彼らは、居場所である学校において獲得したエネルギーを、居場所でない家庭に居続けるために費やし、残り少なくなってきた頃に再び居場所である学校に移動して、居場所でない家庭で居続けるためのエネルギーを獲得している。このようにして彼女/彼らは、家庭から学校への継続した移動をおこなっているため、一見したところ登校し続けているように見えているが、実際には、家庭から学校に登校しているのではなく、学校と家庭の間を継続的に往復しているのである。したがって、貧困や虐待といった困難な家庭状況下で生活していても登校している直接的な理由は、居場所である学校において蓄えられるエネルギーが、居場所でない家庭で費やされるエネルギーよりも多いからであり、このことを現象面からとらえると、子どもが家庭から学校へという一方向的な「登校」ではなく、学校と家庭の間を「行き来」しているからであると考えられる。(笹倉・井上2017a)

上記から、学校に行っていない子どもについて研究する際、「登校/不登校」概念でとらえるのではなく「行き来」概念でとらえること、また、学校状況と家庭状況の両方を視野に入れることの重要性が示唆された。

3 学校と家庭間「行き来」の阻害/促進要因

困難な家庭状況下で生活している小学生による学校と家庭間の行き来を阻害/促進する要因を、学校状況と家庭状況の関係を視野に入れて明らかにするため、公立小学校教員3人に聞き取り調査を実施したところ7事例が得られ、それらを分析した結果、次の3点が明らかになった。(笹倉・井上2017b)

1点、学校と家庭間の行き来ができていない事例と、行き来に支障が生じている事例の間に、家庭状況の困難さという点では違いが見られないので、困難な家庭状況にあるということだけが、学校と家庭間の行き来を阻害する要因になるわけではない。2点、学校と家庭間の行き来ができていない事例と、行き来に支障が生じている事例の間に、担任や教員集団による子どもへのかかわりという点では違いが見られないので、担任をはじめとし、教員間で困難な家庭状況に関する情報が共有されるだけでは、学校と家庭間の行き来を促進する要因になるわけではない。3点、学校と家庭間の行き来ができていない事例と、行き来に支障が生じている事例の間に、周りの子どもや担任との関係という点では違いが見られるので、困難な家庭状況にあっても、周りの子どもとの比較的安定した関係や、自分のことを話せるような担任との関係は、学校と家庭間の行き来を促進する要因となり得るということである。

4 学校・学級の居場所化の「きっかけ」

困難な家庭状況にあっても、「周りの子どもとの比較的安定した関係や、自分のことを話せるような担任との関係」が学校と家庭間の行き来を促進する要因になり得るということは、言い換えれば、「周りの子どもとの比較的安定した関係や、自分のことを話せるような担任との関係」が学校・学級の居場所化の条件であるということの意味している。そこで、学校・学級の居場所化に寄与する条件をさらに探るため、2017年8月、公立小学校教員7人に聞き取り調査を実施した。その中で次のような事例が語られた。（ ）は筆者による補足である。

【事例1】

（新しい学校に赴任して）そのまま（その子の）家庭訪問に行って、話をさせてもらったときに、子どもさんも出てきはって、（お母さんが）「新しい担任の先生よ」と。（子どもとの）顔合わせは全然できて、僕はこんな感じなので、「良かったら学校のほうに散歩にでも行きませんか」と言ったら、もう、ずっと来たんですよ。その辺が不思議。学校の教職員も不思議で。（聞き取り：2017年8月31日）

【事例2】

いつも（運動会の）練習が終わったら帰るんです。運動会の日やったかな、何か僕らも準備とか片付けとかがあって、後の指示とか（子どもに）何にも出さないで、そのまま終わったことがあった。そしたら（その子が2階の）教室に上がっていたみたいなんです。本人もどうしていいか、終わった後にどうしていいかわからない、先生もいない、親もいない、友だちが「上へ上がるで」と言って、何やそのままずるずると上がっていて、教室にいたことがあって。「おう、おまえ、入ったやん、教室」と言ったのが。（聞き取り：2017年8月30日）

【事例1】は、他校から赴任してきて新たに子ども（入学以来ほとんど学校に来ていない6年生男児）の担任になった教員が、その子どもに関して「白紙に近い状態」で家庭訪問をして、「学校のほうに散歩にでも行きませんか」と声をかけると、そのまま一緒に学校に行ったというものである。【事例2】は、運動会で披露する組体操の練習だけに参加していた子ども（4年生のときからほとんど学校に来ていない6年生男児）が、運動会当日、教員による指示等がなかったため、彼のことを知っている友だちに言われるがまま一緒に2階の教室に入っていたというものである。

【事例1】と【事例2】に共通しているのは、長期にわたって学校に行っていなかった子どもが、自らの意志ではないにしても、教員や友だちとの関係の中で、結果として学校や学級に足を踏み入れたという事実である。そして両者の事例は、学校や学級の居場所化の条件というよりも、むしろ学校や学級が居場所化する、あるいは、居場所化の可能性を

はらむ「きっかけ」を示していると言える。

調査研究をとおして学校や学級の居場所化に寄与する条件を明らかにしてもそれらの諸条件が、子どもにそのようなものとして認識されなければ有効に機能することはない。そして、学校や学級の居場所化の条件が有効に機能し始めるとき、すなわち、学校や学級の居場所化の条件を子どもがそのようなものとして認識するときというのが、学校や学級の居場所化の「きっかけ」なのである。

【事例1】と【事例2】の子どもは、自覚的であるかどうかにかかわらず、いかなる思いをもって教員と一緒に学校に行ったのであろうか、いかなる思いをもって友だちと一緒に学級に入ったのであろうか。言い換えれば、【事例1】と【事例2】の子どもの意味世界は、いかなるものであるのかということである。この調査をとおして、困難な家庭状況にある小学生が、学校と家庭間を「行き来」するにあたり、彼女/彼らが学校や学級を居場所と認識するようになる「きっかけ」が、いかなる意味世界として経験されるのかを把握する必要性が明らかになった。

Ⅲ 方法

本研究は文献研究であり、日本教育学会倫理綱領、及び、中国四国教育学会倫理綱領に則っておこなった。先行研究の検討に際しては自説と他説とを峻別し、他説の引用に際しては原著者名・文献・出版社・出版年・引用箇所を明示した。

Ⅳ 結果

困難な家庭状況下にある小学生が、学校と家庭間を「行き来」するにあたり、彼女/彼らが学校や学級を居場所と認識するようになる「きっかけ」が、いかなる意味世界として経験されるのか。それを記述するには、【事例1】と【事例2】の情報だけでは難しい。なぜなら、学校や学級が居場所化するきっかけとなる意味世界は、そこに居合わせた複数の人たちの間で行き交い浸透し合っている喜怒哀楽の情動が明らかになってこそ、とらえることができるものと言えるからである。そして、複数の人たちの中で情動が行き交う場面では、独特の雰囲気をもった空間や時の流れが生じている。

保育学では、かねてからこのような場面を大切にした議論がおこなわれており、鯨岡(2015)はそれを「接面」と呼んでいる。接面は、目に見えるような明確な形を伴っているわけではなく、感受されて初めて存在することになるものである。したがって、接面で行き交い浸透しあっている情動を感受するには、自らの身体に耳を澄ませ、そこに関与する者の経験を当事者の視点からとらえる姿勢が求められるという。鯨岡は、このような接面を他者と共有する方法としてエピソード記述を提唱している。なぜならエピソード記述は、その場に生きる人を生き生きと蘇らせるために、経験したことの全体から印象深かったことを切り取って提示できるからである。

以上から、困難な家庭状況にある小学生が学校と家庭間を「行き来」するにあたり、彼

女/彼らが学校や学級を居場所と認識するようになる「きっかけ」が、いかなる意味世界として経験されるのかを把握するためには、エピソードを用いた研究が有効であることが明らかになった。

V 考察

接面に注目しながら子どもの意味世界をエピソードによって描き出すことの意味について、エピソードが現実のいかなる側面を表現しているのかという観点から考察する。

現実に対応する言葉には「リアリティ」と「アクチュアリティ」がある。木村(1994)は、両者を語源から説き起こして次のように述べている。

「リアリティ」はラテン語の「レース」resつまり「事物」という語から来ていて、事物的・対象的な現実、私たちが勝手に作りだしたり操作したりすることのできない既成の現実を指す場合に用いられるのが原義である。これに対して「アクチュアリティ」のほうは、ラテン語で「行為」「行動」を意味する「アークチオー」actioから来ている。だからそれは現在ただいまの時点で途絶えることなく進行している活動中の現実、対象的な認識によっては捉えることができず、それに関与している人が自分自身のアクティブな行動によって対処する以外ないような現実を指している(木村1994:29)。

上記にしたがって整理すれば、リアリティとは、「事物的・対象的な現実、私たちが勝手に作りだしたり操作したりすることのできない既成の現実」を指しており、「現実を構成する事物の存在に関して、これを認識し確認する立場から言われ」(木村2000:13)ていることがわかる。一方、アクチュアリティとは、「現在ただいまの時点で途絶えることなく進行している活動中の現実、対象的な認識によっては捉えることができず、それに関与している人が自分自身のアクティブな行動によって対処する以外ないような現実」を指しており、「現実に向かってはたらきかける行為のはたらきかけそのものに関して言われ」(木村2000:13)ていることがわかる。

接面としての意味世界を、上記のアクチュアリティ理解に即して説明すれば次のようになるであろう。先に述べたように、接面は目に見えるような明確な形を伴っているわけではなく、感受されて初めて存在することになる。そして、接面が感受できたのであれば、その前提として、本人が自覚しているかどうかにかかわらず、「自分自身のアクティブな行動」や「現実に向かってはたらきかける行為のはたらきかけ」がすでに存在していたことになる。

このように見てくると、エピソードによって描き出される接面としての意味世界は、現実のリアリティとしての側面ではなく、アクチュアリティとしての側面を表現していることがわかる。つまり、子どもの意味世界をエピソードによって描き出すことの意味は、学校や学級を居場所として認識するようになった子どもに内在する「アクティブな行動」や

「現実に向かってはたらきかける行為のはたらきかけ」を描き出せることであると考察される。

VI 結論

本研究の目的は、困難な家庭状況にある小学生が学校と家庭間を「行き来」するにあたり、彼女/彼らが学校や学級を居場所と認識するようになる「きっかけ」が、いかなる意味世界として経験されるのかを把握するために有効な研究方法を明らかにすることであった。文献を検討した結果、「きっかけ」がいかなる意味世界として経験されるのかを把握するためには、エピソードを用いた研究が有効であることが明らかになった。また、子どもの意味世界をエピソードによって描き出すことの意味は、学校や学級を居場所として認識するようになった子どもに内在する「アクティブな行動」や「現実に向かってはたらきかける行為のはたらきかけ」を描き出せることであると考察された。

※本研究は、日本学術振興会平成28-30年度科学研究費（課題番号：16K04643、研究代表者：笹倉）の助成を受けておこなったものの一部である。

※本稿は、中国四国教育学会第69回大会（2017年11月25日、於：広島女学院大学）において行った発表内容に加筆・修正をおこなったものである。

【文献】

保坂 亨（2010）「脱落型不登校の実態調査」酒井朗編著『不登校現象の社会・文化的多様性と支援ネットワーク構築に関する教育臨床社会学』, 10-18.

保坂 亨（2014）「脱落型不登校と『危険な欠席』、『行方不明』（特集 学校は原因かそれとも闘うヒーローか：学校病理の現在）」『青少年問題』61（春季）, 10-17.

木村 敏（1994）『心の病理を考える』岩波書店.

木村 敏（2000）『偶然性の精神病理』岩波書店.

鯨岡 峻（2015）『保育の場で子どもの心をどのように育むのか —『接面』での心の動きをエピソードで綴る』ミネルヴァ書房.

長尾正崇（2008）「臨床法医学で読む虐待事件（2）不登校の原因が子ども虐待であった虐待死事例」『子どもの虐待とネグレクト』10(3), 322-328.

酒井 朗・川畑 俊一（2011）「不登校問題の批判的検討—脱落型不登校の顕在化と支援体制の変化に基づいて—」『大妻女子大学家政系研究紀要』47, 47-58.

笹倉千佳弘（2017）「脱落型不登校研究の動向と課題」『就実論叢』46, 169-175.

笹倉千佳弘・井上寿美（2017a）「小学校教員の認識からみた脱落型不登校児童の実態—登校阻害要因の観点から—」『就実教育実践研究』10, 15-22.

笹倉千佳弘・井上寿美（2017b）「困難な家庭状況にある小学生の学校と家庭間の『行き来』をめぐる阻害/促進要因」『日本教育学会第76回大会発表要旨収録』298-299.

- 新藤こずえ (2013) 「スクールソーシャルワークからみた不登校と貧困に関する一考察」『立正社会福祉研究』14(2), 15-23.
- 山田恵子 (2015) 「スクールソーシャルワークにおける「家庭訪問」の意義と必要性 — 貧困家庭等における長期不登校問題の解決のために—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第1分冊61, 21-34.
- 山口倫子 (2013) 「貧困家庭における不登校児童への支援について—スクールソーシャルワーク実践からの一考察—」『福祉臨床学科紀要』10, 89-98.